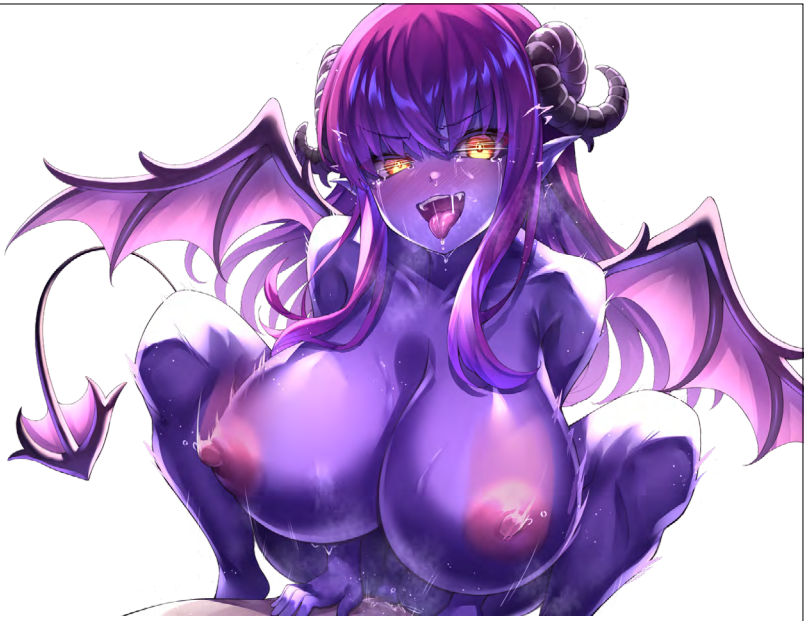
淫魔将軍は
ふたなり
魔法少女に
完敗する

淫魔将軍は
ふたなり魔法少女に
感落ちする完敗する

【プロローグ　淫魔将軍の情事】
【第一章　魔法少女とエリート淫魔の前戯勝負】
【第二章　ふたなりチ○ポでアヘ狂い陥落する淫魔将軍（笑）】
【第三章　魔法制御ディルドで無限寸止め発狂するザコザコ淫魔】
【最終章　完堕ちクソ雑魚メス淫豚の名器ＶＳ魔法少女ルカ】



【名前】ルルヴェーラ・ジアリスタ
【評価】妖淫跋扈
【年齢】外見年齢：２３歳
実年齢：１２２歳
【身長】１６２センチ
【体重】６３キロ
【属性】淫乱サキュバス・小悪党・幹部
【スリーサイズ】
Ｂ１０５/Ｗ５５/Ｈ９８（Ｍカップ）
【趣味】セックス
【特技】グラインド騎乗位・パイズリ
【嫌いなもの】馬鹿にされること
【好きなプレイ】一方的な搾取

【プロローグ　淫魔将軍の情事】

三日月が嘲笑いながら夜天の東京を見下す。

泥濘めいた暗雲は美しい星々を汚しながら、夏の軟風に導かれ何処かへと過ぎ去っていく。

掃き溜めの都市部に差し込む幻想的な月華は、舞台装置の照明が如く。

今は唯、音さえ立てず夜の東京を映し出す。

しかし風情のある真夜中に、

「んっ♥　あんっ！　あぁん♪　んっ♥　あぁんッ……♥」

艶を帯びた嬌声が静謐な摩天楼を切り裂く。

「あはッ♥　んッ！　あぁ♥　気持ち良いッ♥　中年おじさんの疲れマラ、私のイイところにコツンコツンって当たってるぅ♥　んひゃぁん……♥」

商社ビルの屋上で性交に耽ける男女がいる。

リードしているのは女性側であり、男は仰向けに寝転がり夜空を仰ぐ。一糸纏わぬ女性は人目を憚らず妖艶な声を弾けさせながら、男性を組み伏せ快楽を貪っている最中だった。

男女の結合部からは粘液同士が擦れ、肉体が打ち付けられる――淫靡で卑猥な協奏曲が奏でられている。

パンッ！　ぱんッ！　ぱちゅんッ！　ぱちゅん！　ぱっちゅッん♥

「んくぅ♥んぁっ♥　そ、そこイイッ！　あん♥　んぁ♥　ふふふッ♪　おじさんも頑張って下から突き上げてくれないと、私をイかせるなんて出来ないよ～♪　しっかり私を気持ちよくしてイかしてくれないとぉ……おじさんの奥さんも息子さんも殺しちゃうんだから♪　しっかり下からピストンしてよねー♥」

かわいい声を弾けさせながら腰を動かす女性、彼女は名をルルヴェーラ・ジアリスタと言う。

外見こそ十代後半のうら若き乙女であるが、実年齢は百歳を超える歴とした姦淫を十八番とする悪魔である。その証左に肩甲骨付近から生えた天鼠型の黒翼は彼女が人間ではないという事実を如実に物語っていた。この現代で魔王復活を目論む「ＸＥＯＮ」という組織の四天王――エリート女幹部の一人である。

極悪非道な女性であるが、女体という面で見た際に彼女の妖艶さは群を抜いていた。

悪魔族特有の瑠璃色の肌こそ人間とは異なるものの、日頃から丹念にスキンケアを施しているため絹糸の様なきめ細やかさと、もちもちと張りのある肌質を保っている。星空にも負けず劣らずの美しい黒髪は腰元まで届くほど長く、彼女が腰をグラインドさせる度にふわりと空気を巻き込みながら膨らみ、女性特有の甘い香りを振り撒く。

ほんのりと腹斜筋が浮き出るほどまでに引き締まったウエストに、柔らかさを維持しながらも上向きのハリのあるヒップは、世の女性のほとんどが羨望の眼差しを向けるほどのプロポーションだ。

だがそれ以上に目を引くのは彼女の巨大な乳房である。

扇情の権化と呼ぶに相応しい巨大な乳肉は片方がメロン大ほどもあった。双丘は彼女が腰を動かす度に振り子の様に大きく揺れ動き、可愛らしい乳頭はツンとそそり勃っている。豊満なバストは針先で突いたらパツンと弾けてしまいそうなほど瑞々しい張りに満ち、並の男性ならば乳房の動きを注視するだけで射精してしまうだろう。

そしてルルヴェーラは現在、己の美貌を誇示するように、薄汚い中年男性と騎乗位セックスを堪能している。

「あんっ♥　ぁん♥　んっんっんーっ♥　はふぅ、おじさんのち○ぽ、マジさいこー♪　んぁ♥　腰が自然に、んっ、動いちゃう♥」

ばちゅんっ！　ぱちゅんッ！　ぱんぱんッ！　パン、ばっちゅん……っ！

禍々しくも幼さの残る容(かんぼせ)の頬は林檎色に紅潮し、月明かりを吸い込みながら悦色を増していく。

「あン♥　んっ！　んくっ♥　ふぁあ♥　あぁん……っ！　あぁんッ♥」

弄ぶ様な仕草で腰をくねらせ続けるルルヴェーラ。彼女の口からは官能的な吐息が溢れ、夜風すらも淫靡に濡らしていく。

「ほーら♪　おじさん！　お手々がお留守になってますよー♪」

ルルヴェーラは餅付きが如きピストン運動を少しだけ緩めてから、強引に男性の手を取り、己の乳房に宛がった。

「私のやわらかMカップ爆乳、今だけは気が済むまで揉んで良いのよ♪　このおっぱいね、大っきいだけじゃなくて感度も抜群なんだから♥　揉めば揉むほどぉ……ルルの可愛い喘ぎ声、聞けちゃうよー♥」

既に十回以上の射精を行い、心身ともに衰弱した男は既に視野と意識共に混濁状態に有るのだが、人外の魔性には逆らえず彼女の魔乳に手を伸ばしてしまう。

もにゅん……♥

「あぁぁあぁん……♥」

男が乳頭からその肉の海に手を挿入すると、ルルヴェーラは態とらしく喘いだ。

「うんうん♪　やっぱり男の人って、おっぱいには逆らえないよねぇー♥」

――否。

男性の手ですら〈揉む〉というよりも〈食べられる〉という表現の方が適切かもしれない。ゴツゴツとした彼の五指は、柔らかい乳肉の中にどっぷりと沈み込む。

それでも男は必死にルルヴェーラの乳房を愛撫する。あまりの必死さにルルヴェーラは堪らず吹き出し、嘲笑した。

「ぷっ！　おじさん必死すぎ、ウケるウケる！　そうそう♥　優しくおっぱい揉んでぇ……ん♥　案外上手なんだね、おじさん♥　ご褒美におち○ちんさん、もーっと気持ちよくしてあ・げ・る♪」

彼女はそう告げたかと思うと、自身の腰を叩きつける勢いを激しくさせた。

「んッ、あんッ♥　あっ！　良い！　いっ♥　やば、やばぁい♪　私もっ、もぅ興奮抑えられなくなってきちゃったァ♥　駄ッ目ぇ……んッ♥」

大きな嬌声が嬌声が月夜に響き渡る。一方でルルヴェーラの爆乳を揉んでいた男性はバストの中で乳頭を見つけたのか、親指と人差し指で思いっきり摘んだ。

「ひゃぁん♥　お、おじさんダメぇ……！　ち、乳首っ♥　バストのお豆、私弱いのぉ……！　ぁあああんッ♥」

平生よりも硬直している乳首はビンビンにそそり勃っているため刺激には鋭敏になっている。

鋭敏状態の乳頭を思いっきり抓られ、悲鳴にも近い声をルルヴェーラは上げて、一度だけ体全体が脈動させる。

「んもー！　私のおっぱいさんは感度良好でデリケートなんだから、もっと優しくモミモミしてよね♥

……うん、そうそう。そうやって下から、特大Mカップおっぱいを支えてくれてるなら、もっと激しいグラインド騎乗位でおじさんを天国に連れて行ってあげるんだから！」

言葉通りルルヴェーラは、騎乗位を苛烈にする。

ずちゅ！　ぱちゃん♥　ぱちゅん！　ばちゅんっ♥　ずっぷずっぷッ♥

膨らんだ亀頭を女性器入り口ギリギリまで引き抜いてから、体重と重力を利用しながら一気に子宮奥まで叩きつける。

単純な動作を圧倒的な速度で行うルルヴェーラに対し、男性は一縷の望みに縋る様に片乳5キロもある乳房を支えながら、揉んで抵抗することしか出来なかった。男性側は既に射精寸前で、このまま射精したら心筋梗塞で死ぬことを男も本能で理解している。だからこそ文字通り必死に暴発を堪えていたのだが、

「あっ♥ ぁん……！　オマ〇コとおっぱいの同時責め堪らないッ！　んぁっ！　んっぁん……♥　ぁんンッ――あぁ――あああぁッん♥」

ずっちょッ♥　じゅっぷ、じゅぷっ！　じゅぷっ！　ずぷぷぷぷっ……♥

淫魔ルルヴェーラの膣はガチガチに硬直した死亡寸前ペニスをいたく気に入ったらしく、いつも以上に男性器を締め上げる。

「ほらほらほら……♪　エリートサキュバスのトロふわおま〇この味はどうかしら？　人間如きのガバマンとは締まりも具合も段違いでしょう？　それにこの腰振りテクは人間のメスには絶対真似できないん、だっからぁあ♥ んっ♥　あっん♥　ぉん♥　うぁん♥　ふぅ……！　こーんなの極上おま〇こ味わっちゃったら、もう奥さんとセックスしても射精出来なくなっちゃうよね♥」

ルルヴェーラの言葉は事実だ。実際、彼女の膣に挿入して五分と耐える事が出来たオスは、人間界でも魔界でも一人たりともいなかった。要因としては自らのクリトリスやGスポットを抉るための前後動きと、男根を気持ち良くさせる上下動き――この二つの動きを組み合わせた独特の三次元的な腰使いは、まさに色欲の権化と呼ぶに相応しい仕草だった。

加えてサキュバス特有の女性器の膣構造は人間の名器などと比べることが烏滸がましいほどの精密さである。膣全体に瀰漫（びまん）するザラザラとした無数の触手襞にスカート型の螺旋型ビラも兼ね備えている。そのオナホール顔負けのヴァギナは男性器の挿入を認知するや否や、あっと言う間に絡め取り奥へ奥へと誘い込みながら先端から裏筋、カリ首……肉棒全体を激しくそして丁寧に愛撫する。さらに膣付近の筋肉の構造も人間とは異なり入口から子宮口の膣圧は成人女性の握力ほどもあるため高刺激である。

愛液の分泌量すら自在に制御することが出来る上に、それ自体が媚薬の効果も含まれているため異性を性的に興奮させる作用が多分に含まれている。

まさにセックスをするために存在する女性器なのだ。

「ぁ……んぁッ！　ふあッ♥　あっあっあッ……ああッ……！」

ルルヴェーラの秘肉に挿入した男性があっという間に早漏射精してしまうのも已む無しといった具合の名器ではあるものの、反面人間のヴァギナよりも遥かに性感帯としても突出しているため、彼女自身も快楽を感受しやすいという弱点もある。

ところが彼女自身はこの特性は寧ろメリットであると思っていた。

自分を満足させられるペニスなんてこの世に存在するはずもないのだが、粗チンでも気持ち良くセックス

が出来るのだから一石二鳥である、というのがルルヴェーラがたどり着いた結論であった。だから、

「ふふ、おじさんのオチ〇チンも、んッ♥　限界みたいね♪　あんっ♥　大丈夫大丈夫ぅん♪　わ、私と一緒にイこ♥　んっんっ……んぁッあっあっ……んんぁああ♥　うん　ぁッ♥　ダメダメな人生最期のお射精、気持ちよくぴゅっぴゅしようねぇ♪　わ、私も、限界近い、からぁ……んんんッ！」

ずっぷ♥　ずぷっ！　ずちゅッずちゅッ！　ずちょ♥　ぐちょんッ……！

言葉通り強引に腰を動かし始めるルルヴェーラ。

「んっぁ♥ぁん♥　あっぁッ♥んふっ……ぁあんッ！　んぁ♥　ぁっ！　イっ！　あぁ……ッ♥」

先ほどまで演技めいた喘ぎ声ではなく、女としての本能から溢れる雄叫びめいた甘い吐息が溢れ始める。少女と女性の中間に位置する美しい顔は恍惚に歪み、息遣いも荒くなっている。

ルルヴェーラ自身も限界が近づいている事を自覚しているのか自身の快楽を優先し始めた。前かがみになり、ラストスパートを駆け上がるため腰を早く上下に動かし始めた。

ずっ♡　ずんっ！　ずちゅッ！　バチュんっ！　ぱちゅんパチュンッ！　パンっパンっ♥

粘液が絡み合う音が淫靡に鳴き、肉が擦れ合う音色が宙を舞う。

男性器がビクビクと震え始め、射精が近いことを示した。

「わ、私も、もぅ、い、イくからっ！　一緒にぃ♥　一緒にイこ♥　んぁ！　い、イくっ！　んぉ♥　もう、ダメダメダメ！　イクッ！　おじさんのダメち〇ぽでイぐッ！　イく、イくッ！　ああッ♥　もうダメっ！　イっちゃうぅうあああああんあああああ――♥」

ルルヴェーラは大きく弓形に仰反りながら絶頂の咆哮を発した。

キュンキュンッ♥

彼女の絶叫に呼応するかのように、男性器を根本までぬっぽりと咥え込んだ膣襞は撓るように蠢動する。

ルルヴェーラの絶頂に呼応し全ての膣壁が一斉に収縮したのだ。ザリザリとしたマン触の一本一本が意思を持ったかのようにペニスに纏わりつき嬲り殺そうと圧力を高める。あまりの膣の具合に、組み伏せられた男は呆気なく彼女の中にありったけの精を吐き出してしまう。

びゅるるッ！　びゅく……ぴゅく……ぴゅっ……。

精液量も濃さも成人男性以上であったが、ルルヴェーラの子宮は彼の渾身の射精を冷笑するかのように、ごくごくと飲み込んだ。

サキュバスの膣は、たとえ膣内射精をされようとも妊娠することは滅多に無い。それは並大抵の精液量では妊娠する前に彼女の卵子が精子を貪り食べてしまうからだ。ルルヴェーラたちサキュバスにとって精液とは文字通り食料であり餌以外の何者でもない。だからこそ妊娠したときは交配相手のことを無条件に愛してしまうという負の面も持ち合わせている不安定な種族であるのだがルルヴェーラには関係のないことであった。

「あふぅ……♥　ぁぁん♥　……んっ♥　ん……んふっ……♥　はぁ……おま○こ火傷しちゃいそー♪　現代社会のストレスで熟成された欲求不満ザー汁が、私のオマ○コにたっぷり注がれちゃったぁ。妊娠しちゃうかもぉ♪　そしたら責任とってね♥」

心にも無い事を呟きながら彼の精液を堪能するルルヴェーラは、満月を見上げながら自身の密肉全体で精液を吸収し始める。

「んくぅん……♥　やっぱ生命力を精子に変換すると味が濃くって美味しいッ……♥　さ、おじさん。もう一回戦やろ、ね――おじさん？」

「――」

すでに十回以上連続で射精させられ、心臓に強い負荷が掛かっていた男性は既に事切れていた。

そんな無様な男性の亡骸を一瞥するや否や、青肌悪魔のルルヴェーラは立ち上がる。

「はー、使えなー。雑魚チ〇ポのくせに一丁前に結婚とか子作りとかしてんじゃねぇーつーの♪　そんなゴミ男は、ぽいっとね♪」

ルルヴェーラは息を引き取ったばかりの男性の死体を事も無げにを蹴り飛ばした。

遺体は高層ビル同士の隙間に吸い込まれるように落下した。数秒後コンクリート染めの大地に叩きつけられた肉塊は、脳漿を撒き散らしマリオネットのようにバラバラに砕け散った。

「あははッ！　死に様は面白いわね！　さぁて次の獲物を探しに――」

「そこまでですわっ！」

気高い声音が、ルルヴェーラの背後から怒声が響き渡る。

「その声は――」

ルルヴェーラはハッとして振り返ったが既に手遅れだった。

眼前には砂金色の髪と無謬の白光を携えた剣閃が眼前に迫っていた。

「――ぁ」

ルルヴェーラは、呆気なく光の濁流に呑み込まれた。

【第一章　魔法少女とエリート淫魔の前戯勝負】

「ん……」

目覚めたルルヴェーラは周囲を見渡した。

「ここは、どこなの……？」

確かに自分はあの時、魔法少女に斬られたはずなのに……。

困惑するルルヴェーラは自身の四肢を確認する。目立った外傷は一つにない上に拘束もされていない。

その上、病院良くあるような硬い褥ではなく、もっと高級のふわふわとしたベッドで寝かされていた様だった。

（この場所は一体……）

自身が寝かされているこの部屋は、医務室や監獄などとは到底思えなかった。

ルルヴェーラがそう思った理由はただ一点――装飾過多であるためだ。

自身が寝かされているのは恐らくセックスプレイ用の巨大な円形ベッド。弾力性の高いマットレスに防水性のシーツが装着されていることからもそれは明らかだった。

室内の設備には他にも二人以上入浴可能な巨大なボウル状の浴槽が設置されており、プラスチック製の棚にはローションだのバイブだのアダルトグッズが積み置かれまるで高級ソープの一室の様だった。

ルルヴェーラはそっと掌を突き出し、

「フレイムッ！」

ルルヴェーラはダメ元で自身の魔力を練り上げ発炎魔法を試みたが、何も発現しなかった。
その有様に襟懐で舌打ちをした。
（ちッ……ご丁寧に私の魔力をごっそり全部吸い上げてくれちゃった上に、毎度お馴染みの精神魔術で『人間に危害が与えられない』命令が施されているわね）
精神魔術は行動を制限する魔法の一種だ。時間の制約こそあるものの、一週間ほどは埋め込まれた支持を遵守しなくてはならない。
今回の命令は『人間に危害を加えてはいけない』いうお決まりの文言だった。だが、その魔法の効果は恐らく一日と持たない期限付きのものである。
それに……、
「ふふふ♥　全く馬鹿の一つ覚えなんだから」
ルルヴェーラは敵対している組織に捉えられてるという危機的状況に対して憂いるどころか、愉しげな微笑みさえ浮かべていた。
（久しぶりにハニートラップで脱出するかぁ♪　イケメンスタッフが入社してるとなお嬉しいんだけどね）
『人に危害を加えてはいけない』という命令は裏を返せば『危害を伴わないセックスプレイ』ならば問題がないということだ。
ルルヴェーラはぺろりと舌を出し、艶のある群青色の上唇を湿らせる。
彼女は以前にも何度か捕まったことがあった。しかし、その度に日本支部の男性スタッフに色仕掛けを図り脱出してきた経歴がある。

今回もお得意のハニトラで脱出しようと画策していたのだが――。
「あら。ようやく目覚めましたのね。まったく待ちくたびれましたわ」
ルルヴェーラは聞き慣れた憎き少女の声音に反応し、そちらに顔を向けた。
「……あら。瑠香ちゃんじゃない。ひょっとして今回は『魔法少女日本支部』のエース自ら監視してくれるのかしら？」
ルルヴェーラは余裕を見せるために、あえて目を細める。
視線の先では、玲瓏な笑みを浮かべた齢十四程度の少女が椅子に腰掛けて読書に興じている。
彼女の名前は五十鈴瑠香。
この街を守る魔法少女の一人であり、先程、姦淫後のルルヴェーラを奇襲したのも彼女であった。
あどけなさを残した可愛らしい顔立ちはほんのりと苛立ちが混じっているものの、淡い砂金色の縦ロールも相まってフランス人形のように美しい。第二次性徴期を迎えたばかりの彼女の肢体は灰色のブレザーとスカートに包まれているものの、女性としての色香がほんのりと滲み出ているものの、まだ相応の無辜さを残している。
「相変わらずの減らず口ですわね、ルルヴェーラ。ええ、もちろんですわ。何度も脱走されては我々の組織の名折れですもの」
ペーパーブックを閉じた瑠香は一度だけ髪をかき揚げてから、すくりと椅子から立ち上がる。その閑雅な仕草にルルヴェーラは思わず癇癪を覚えてしまう。
「拘束すらしていないだなんて、四天王の私を舐めているのかしら？　それとも貴女を殺して脱走しちゃっ

てもいいってことかしら……ッ？」

ルルヴェーラは眉を顰めながら瑠香をキッと睨みつける。

ところが常人ならば気絶せんばかりの彼女の殺意の圧を受けた瑠香は、しかし飄々と眼力を受け流す。

「魔力のない今の貴女じゃ、ひっくり返っても私には勝てないですわよ。力量さが測れないほど愚昧でもないでしょう。そして、貴女を拘束しない理由は一つしかありませんわ――」

立ち上がったルルヴェーラが腰掛けているベッドに近づきながら、

「――え？」

瑠香はスルスルと、纏っていた学生服を脱ぎ始めた。

白いワイシャツのボタンを一つ一つ丁寧に外し終え、それを床に放り捨てる。

次にはスカートのホックを外し脱ぎ終え、あっと言う間に下着姿になる。瑠香の健康的な肌にはシミ一つなく、そのボディラインはギリシア彫刻のような美麗さを醸し出していた。

しかし瑠香は脱衣の手を止めることなく、少しだけ背伸びしたワインレッド色のブラも取り外す。中から形は良いもののルルヴェーラに比べればあまりにも小ぶりな胸が開放される。まだ汚れを知らないのか、可愛らしい乳頭はキレイな桜色をしていた。

儘、彼女はショーツに手をかけ自身の秘部を晒す。

「――私専用の生オナホールになりなさいな、ルルヴェーラ」

「これは、へぇ。驚きだわ……」

瑠香の股間には女性器だけでなく男性器が備わっていた。

瑠香のふたなりペニスは、だらりと垂れ下がっているものの、勃起前の大きさや形は成人男性のソレと相違なかった。

「あら瑠香ちゃん……ふたなりさんなのね」

珍しいものを見たと言わんばかりにルルヴェーラは口角を釣り上げた。

魔法少女は高純度の魔力を体内に有している。そして魔力は使わないまま放置しておくと、淀み腐り精神を蝕んでしまうのだ。心の腐敗を防ぐために、魔力を精液として吐き出す部位――つまりは男性器が生えるとは聞いていたが、実際に目の当たりにしたのは初めてだった。

瑠香の麗美な顔立ちとは違い、ふにゃふにゃと細く長いペニスは、かろうじて皮が剥かれていた。

（ふぅん、そういうことか♥）

勝手に合点したルルヴェーラは、瑠香を媚びるように見つめた。

「つまり瑠香ちゃんは、私とエッチしたいから生かしてくれたってことよね？　とんだドスケベな魔法少女さんだったのね」

「当然でしょう。私の下心もとい温情がなければ、あの場で惨殺していましたわ。私の精液便所になる以外、貴女に生きる価値はなくってよ」

「チッ……」

ルルヴェーラは下唇を噛みしめたのは、瑠香の発言が紛れもない真実だったからだ。

確かに性交に耽って油断したとは云え、彼女に敗北したのは紛れもない事実。実際こうして囚われているという屈辱が余計にルルヴェーラの精神を苛立たせた。

「私が敵である貴女の言うことを素直に聞くとでも？」
「ええ、ですから勝負をしませんこと？」
にぃっと瑠香は白い歯を覗かせ、年相応の意地悪い笑みを浮かべる。
そして、彼女は部屋の壁に埋め込まれたデジタルカウンターを指差した。ルルヴェーラも、指先に釣られ時計を見ると、時刻は九時五十九分を示していた。
「あと一分でちょうど夜の十時ですわ。今から三十分以内に私が三回射精したら、貴女の勝ち――無罪放免で解放して差し上げますわ。ですが、もしそれが出来なかったら……私専用の精液コキ捨て係になると誓いなさいな」
ルルヴェーラは思惟し、内心でほくそ笑む。
（ほんと馬鹿よね♪　ヤりたい盛りの中〇生の浅はかな提案……所詮性欲バカのお嬢様ってところかしら。こちとらセックスの経験量が違うのよ。三十分もあったら、私のテクニックなら十回以上射精させることが出来るし、骨抜きに出来るわよ。そうしたらここから簡単に脱出できるし、瑠香ちゃんは可愛いから人形にしてショーケースの中で飾ってあげるちゃおっと……♥）
「ルル、そんなの勝負絶対にしたくないんだけどぉ、命令ってゆーならーぁ……仕方ないかなぁ♥」
誰が聞いても棒読みに聞こえるあざとい声調に、瑠香は眉を逆八の字にした。
「別に普通に喋ってくれていいですわよ。気持ち悪い」
瑠香は言いながらルルヴェーラと同じベッドの上に仰向けに寝転んだ。
「あっそ。なら、そうさせてもらうわ」

「ふふ。そちらの口調の方が淫魔将軍っぽくて私は好きですよ。ではカウントダウンしますわ……。三、二、一……ゼロ」

かくして前戯勝負は開始された。

先程までルルヴェーラが寝ていたベッドの縁に腰掛けた瑠香と、ベッドから降り床の上で膝立ちになるルルヴェーラ。

ところが時限式の早抜き勝負だと言うのに、ルルヴェーラは慌てることなく瑠香のフニャフニャと柔らかい肉棒に自身の手のひらをそっと這わせる。

「んっ……♡」

ルルヴェーラのひんやりとした指先の感触に、瑠香は甘い吐息を唇から零す。

「ふふ、顔と同じ様に可愛らしいオチ〇チン……♥」

ルルヴェーラはソーセージサイズの肉棒を弄びながら、包皮を剥いたりと戻したりと、優しい刺激をペニスに与え勃起を促す。

「ぁ……♡　んっ……♡　も、もっと攻撃な責めかと思っていましたが、存外優しいんですのね……ぁ♡」

「これが大人のテクニックよ、存分に堪能しなさいな」

野花を愛でるかのような想定外の甘い刺激によって、瑠香のふたなりペニスはムクムクと勃起し始める。

海綿体に血液が溜まり始める。

ビキビキと硬化し始める瑠香の男根――その外側に青筋が浮かび上がる。

「んぅ……♡　はっ……あぅ……♡　ふーっ……♡」

勃起するペニスに呼応するように徐々に瑠香の淫靡な声が大きくなる。
それでもルルヴェーラは人差し指と親指だけで優しく撫で回し続ける。
しこしこ♪　しこしこしこ♥　しこしこっ♥　しこしこ……。
青筋が竿全体に張り巡らされた瑠香のペニスが、十五センチ程度まで膨張しルルヴェーラの指の中で熱を持ち始める。
ガチガチに勃起した瑠香のペニスをみたルルヴェーラは思わず口角を釣り上げた。
（ふぅん、それなりに立派ね。普通のオスよりも随分逞しいわ♥　ちょっとだけ本気で可愛がってあげちゃおうかしら？　それとも寸止めプレイで懇願させたりしちゃったりして？　ふふふっ♪）
「じゃあ瑠香ちゃん、そろそろしっかりと手コキしてあげるから、いつでも射精していいわよ♥」
ルルヴェーラは鈴口から溢れだしたばかりの新鮮なカウパー汁を自身の手に塗布する。その後、ローション代わりに手に眩し、今度こそ掌の全体で瑠香のペニスを包み込んだ。
「あッ♡　ルルヴェーラの手、ひんやりとしているのにモチモチでしっとりとして……オナ、オナニーの時と、全っ然違う……ッ」
自分の手でシゴくときとは快感が段違いである。
「ふぅん、それはもっと激しくしてほしいってことかしら？」
しこしこ♪　しこしこしこ♥　しこしこっ♥　しこしこ……。
遂にルルヴェーラは激しく手の上下運動のスピードを高める。それだけではなく握力を強めたり弱めたり……速度の緩急を織り交ぜながら、瑠香の反応を楽しむかのように手練手管を駆使しながらふたなりペニス

を弄ぶ。

「あッ、んんぁ♡　んぃッ……ぉッ……ぁあ……ッ！」

ルルヴェーラのシルクの如ききめ細やかな指先が男根を刺激する度に、幼い魔法少女は官能的な悲鳴を曝け出してしまう。瑠香はシーツをぎゅっと握りしめ、歯を食いしばり堪えていた。

ほくそ笑むルルヴェーラとは対象的に瑠香の瞳に狂気が滲み始める。

「ほーら、こうして先っぽだけを掌でぐりぐりぐりーってされると気持ちいけど、絶対に射精できないのよ」

「ぅ……♡　くぅ……はっ♡　ん♡　やっ……先っぽだけゴシゴシってするのだダメっ♡　イけないのに、あッ……♡　ああ……ッ！」

瑠香が、年不相応な艶めかしい喘ぎを吐き出す。

「ふ、フル勃起しますわ……ッ♡」

ルルヴェーラは彼女の発言の意味が理解できなかった。

（はぁ？　フル勃起って……何言っちゃってるのこの子。頭の方がイッちゃってるんじゃないのかしら？）

「んんんっ♡　ル、ルルヴェーラ♡　刮目な、さい♡♡　こ、これが私の自慢のデカマラですわぁ――くぅあああああ――ッッ！」

ビキビキと音を立てながら瑠香のペニスは暴れ狂いながら膨張する。

「――は、え……？？」

目を点にしたルルヴェーラは思わず、ピクピクと震えるふたなりチ〇ポから手を話してしまう。そして眼前で怒張するペニスを見つめることしか出来なかった。